
雨はお嫌い？

きこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨はお嫌い？

【Zマーク】

Z5941Z

【作者名】

きじりん

【あらすじ】

雨が降った。一般的に梅雨といわれる時期だからしようがない。ところで、あなたは雨はお好き？ - - - - 時期はズれているけれど、雨に対する色んな人の気持ちを描いてみました。一日の出来事を徒然と書いていきますので…。

登場人物紹介（前書き）

はじめまして キーリン です！！

これが初投稿作品となります

まだまだ拙い文章ですので、アドバイスなどいただけたと嬉しいです。

それでは、よろしくお願いします。

登場人物紹介

雨が降った。一般的に梅雨と呼ばれる時期だからしじょうがない。
ところで、あなたは雨の日は好きですか？

時期はずれていればれど、雨に対する色々な視点を描いてみた作品
です。

おもな登場人物

【シーン：学校】

木本和哉	高1	男	このシーンでは彼を中心に話が進む
志田幸平	高1	男	能天氣
片木優香	高1	女	ショートヘアのかわい子
木月先輩	高2	男	和哉の部活の先輩

【シーン：少女】

黒髪の少女　名前未定、でもそんなに深い意味は無いで
す。

なお、彼らの名前は実在の人物とは一切関係ありません。
それでは、きこりん初の作品、のんびりですが進めて行こうと思いまます……。

【兼一話】権の口吐き物か? (前編)

せこー記念すべき (?) 第一話です
今回め【シーン・学校】ですね。

【第一話】桜の日は晴れ?

しつとつとした朝だった。

朝日もいつもより少なく、薄暗い。

「雨か。」

まだ温もつの残る布団から起き上がりつつ、今日歩きだな、と思つた。

晴れている日ならば、自転車で時間をかけて登校できるのだが。しかし雨の中歩くのも、不思議と嫌いになれない。

「早く支度しなさい。」

とこへ、お母さんの声。かすかに香るお味噌の匂い。

外が夜のように薄暗くても、ちやんと朝の時間は進んでいた。

「おはよう。チャリで来たからびしょびしょだよお

クラス一能天氣（だと思つ）の志田幸平が髪から水滴を滴らせ、屈託のない笑顔でいつものよつて話しかけてきた。

雨の中、無理やり自転車に乗つてみると、ひつなる。
すると、服という服が雨を吸つて、重い。あまり気持ちのこゝもの

ではない。

これで一寸過いりますのはさすがにきついだらう。

それでも幸平は笑顔。そういう奴だ。

幸平の笑顔は薄暗い雨の日でも、明るい。

教室は二階。湿度は高い。換気扇のかすかな音を聞きながら窓の外を眺めていると

不意に、田の前が明るくなる。

ドーン

他のクラスからも、周りからも女子のキャーッといつ声が上がる。雷が、近くに落ちたみたいだ。

朝から盛大に雷を鳴らすなんて、空も忙しいな。
なんて、思っている自分が少しおかしく思える。
だが、雷は嫌いじやない。薄暗い空に白い光の筋が入るのが見える
と、わくわくする。

このまま、一斉下校にならないかな。

そんなクラスメートの声とともに

木本和哉は始業のベルを聞いた。

【第一話】墨の口はなぜ？（後編）

一 話題から風景描写に苦戦です ^ ^ ;

人物像も固まらないし…

あ、木本君の名前、最後の最後に出ましたね！

とつあえず、続きを書いてこきますのでー！

アドバイスなどありましたら遠慮なくお願ひします^_^(ーー) <

【兼】【描】 横の口の『世界』？（前書き）

【シーン・少女】です。短いです……
では、どうも

【第一話】雨の日の『世界』？

雨。五月雨。梅雨。

どれもいい響きだ。

なんたつてしつとつと薄暗い、こんな幻想的な景色は雨の日以外には見られない。

ああ、今日もいい日だ…

部屋の窓からしどとと雨の降りしきる外を眺めながら、黒髪の少女は思つ。

彼女の膝の上にせば髪と同じく黒い毛の猫。丸まつてのんびりとした様子だ。

「ねえ、今日は外に出でみたいと思わない？」

「やあ、と猫が鳴く。少女に答えるよひに。イエスかノーかは分からぬ」

少女も外を眺めたまま独り言のよひに続けた。

「じつじつ世間一般とやうでは、雨の日は憂鬱だと決め込んでいるのかじる。

「雨の日だからいつもと違つて『世界』が見えるのこ、ね

うふふ、と微笑む。膝の上では相変わらず猫がくつろいでいた。少女はそして思い立ったようにそつと猫を床におろし、音も無くしかし楽しそうに部屋を出て行った。

【第一話】窓の口の『世界』？（後書き）

自分でも何が書きたいのか分からぬ。
はしゃぐ、このお話をどうに向かってこらのじょい...?

迷走して、登場人物の気持ちだけ述べて、
終わりそつた予感です。（寧ろそつとうかな）

アドバイス、メッセージ、お待ちしてます^_^(ーー)^

【第二話】権の口吐き物語？（前編）

これが一般論かと思われる、第二話です
あくまで作者が一般論だと思い込んでいるだけですが… ^ ^ ;

【シーン・学校】です

【第二話】桜の口は憂鬱？

「憂鬱よね」

「え？」

背後から突然声をかけられ、言葉の意味を理解できなかつた和哉は気の抜けた声で振り返る。

そこにはクラスメートの片木優香が短い髪をかき上げながらひびひび見ていた。

「外見て何思つてたの？」

「ん、いや特に何も…片木」セビウしたんだ？」

「クラスでも一枚目に入るアンタが感傷に浸つてている様子だつたら、からかいに来たのよ」

「感傷つて…俺は何も思つてねえよ」

「あら、じつかしり

こういうのは冗談であることは分かつてゐる。なんたつて片木の日がそれを物語つてゐる。

さてどこからが冗談かつて？

謙遜する訳ではないが一枚目と言うのも俺としては頷けないものだ。

「でも男子はいいわよね」

「こきなりなんだよ」

片木が俺の頭に手を伸ばしてきたのド反射的によける。

「女子の髪には湿度は大敵なのよ。せっかくアイロンで整えたのに
湿氣でうねりちゃうんだもの」

「お前のやの短さじや関係ない話だろ?」

「なによ、失礼ね…って言ひ返せないけど」

からかい返しに軽く言ひしゃると、片木はわざとらしさべべつと声
をだし、おじけた。

でも、片木の最初の言葉…

「雨の日つて憂鬱なのか?」

「憂鬱でしょ。木本はそつじやないの?」

「いや、あまり憂鬱には思つた」となし

「へえ、珍しい人もいるのね」

なんか感心した田で見られている気がする。そんなに珍しいか？
むしろ爾の口を憂鬱と言つ方が俺にとっては不思議なんだが……。

そうか、少なくとも女子は憂鬱に感じているのか。
って、なんで俺は感心してるんだ。

血盟を繰り返す。いや、ただのノリシッコミか。

【第二回】極の口占鑑賞？（後編）

わざわざが分からん…

とにかく、最後まで書いて

消す。

アドバイス、メッセージ、お待ちしております^_^(ーー)^\n

【範囲指定】 桜の匂の女 (前書き)

試験終わったー！色々な意味で・・・

さて、小説のはじめですが・・・

先に書きます

今回も短いです

では【シーン・少女】 どうぞ・・・

【兼因語】黙の口の匂い

匂をあけると胸にっぽい匂がる、アスファルトの濡れたにおい。
現代らしさの匂い。

まだ土の地面だった頃はこんな匂いじゃないんだもんな。

黒髪の少女はそんな事を思いながら

なりげ土の匂いも感じに行いつかと森林公园の方向に足を向ける。

少女の足取りはそのまますぐな黒髪のよつて迷こせ無く。
しかしやはり楽しげに歩いて行く。

黒字に白い水玉の縞、水滴をはじいて光るよつた黒のレインブーツ。

彼女の周りは黒で溢れている。
だがそのどれもが優しい黒。

【兼回答】翌の日の会議（後書き）

あれで、メールとか書つものですかね

といふと終わらぬつか。予定ではあと日語めじ必頼ですね。

こんな感じですが

アドバイス、メッセージ待ちしごくまくへ（――）へ

【第五話】樋の口は泥まみれ？（前書き）

「ヤツシロノガタイムアウェイした」とこの警笛に呑まれ
これが4回目のチャレンジ…

もはや警告の意味の意味が理解できなくなつた。つむり…

とにかく【シーン・学校】ビル…

【第五話】他の口は泥まみれ？

放課後

まだ降つてはいるが幾分小降りになつた雨を眺めながら、和哉は部室へと向かつていた。

サッカー部に入ったばかりである和哉は、まだレギュラーではない。だが練習は当たり前のように毎日ある。

「今日はトレーニングかな」

そひ、残念そうにつぶやく。

雨により緩くなつた土の地面は、走りまわればたちまちで「じょ」。自分たちも泥まみれになる。そのため、たいていの運動部は雨が降ると校内でトレーニングとなるのだ。

「泥んこも楽しいの？」

「それが許されるのも幼稚園児までつてな」

「木月先輩っ！？」

部室の扉を開けると、中から先輩の声が飛んできた。「泥んこも～」は気付かないうちに口をついて出ていたらしい。別に聞かれても悪いことではない。ただ、驚いたのはすでに、俺が一番乗りだと思つていたそこに人がいたことで…

部室に入つたとたんに広がる独特的の匂いを感じながら俺がカバンを下ろすと、笑顔の先輩は言葉を続ける。

「おまえも面白いこといつよな。高校生にもなつて泥んこなんて、俺だつたら母親に叱られるから」『りつだな』

「まあ……確かに」

「その『確かに』はどうちへの確かに、だよ」

曖昧に返事をすると、先輩はクックと楽しげに話を突っ込む。その意味が分からず、「どういへ？」と単語で聞き返す。

「木本の発言が面白いのか、母親に叱られる事か」

ああ、なるほど。でもやつこいつ先輩の視点も面白いこといつが、… そう思いつつ当たり前のよう（当たり前なのが）、「そりゃ叱られる方ですよ」と答える。すると先輩はとも驚いたような顔を見せた。

「何だ、おまえの発言の面白さは天然ものだったのか」

「何ですかそれ」

「だつて木本や、たまーに不思議ぢやん発言すんじやん？」

「不思議ぢやん…？」

「…『記憶にござらません』

〔冗談めかして言つたが、本当に『不思議ぢやん発言』とやひこ心切た
りがない。〕

うーん、と俺が首をひねつてると「それそれ」と先輩は笑いを堪

えていた

「でも俺はそういう個性、大事だと思つかせ」

そう言いつつ、何とか笑いを堪えた先輩は「トレーニング行くぞ」と振り返りながら部室を出て行った。その肩はまだ微かに震えていたが

「…俺って不思議ちやんだったか？」

一人残つた部室、窓の外にはまた強くなり始めた雨。
和哉の口からこぼれ落ちた疑問は、その雨音に書き消された

【第五話】桜の口は泥まみれ？（後書き）

…終わり方微妙で「めんなさい」

そして、和哉君が不思議ちゃんにされたのは

私の中でのキャラ設定が曖昧なせいにして…申し訳ありませんvvv；

余談ですが、木舟先輩の「その『確かに』はどうかへの確かに、だよ」とこいつの詞は、素の私の気持ちだったりします。

そういう終わり方ひとつですが
質問、意見などありましたら喜んで受け付けますので^_^(—)(—)^

【第六話】樫の口の玉骨ご（樫骨）

ヒルヒルの轆を運んでいたものも無くなつました……

【シーン・シナ】ヒルヒル

【第六話】雨の日の出会い

森林公園までの道のりの途中に、商店街がある。

それほど大規模なところではないが、活気のある通りだ。

黒髪の少女はそこで少し歩みを遅くして、見慣れた街並みを眺める。今日も八百屋のおばちゃんは元気よく声を張り上げているし、魚屋のおじちゃんも威勢のいい声で道行く客に声をかけていた。

雨の日でも変わらない風景。

途中の裏路地にはえさを求めて猫がたむらし、学校帰りの小学生は明るい黄色の合羽をまとつて少女のわきを走りぬけていく。ふと目の端で手招きする人をとらえ、少女はそちらに顔を向ける。そこにあつた、通いなれたパン屋のガラス窓の向こうで女人人が少女に向かつて「いらっしゃい」と伝えていた。

カラーン、と明るいベルの音と共にパン屋に足を踏み入れると、そこは外の雨の匂いから一変して焼きたての幸せなパンの匂いであふれかえつっていた。

「そろそろかなつて思つてたの」

笑顔でパン屋の女主人は少女に言ひ。雨の日になると毎日のようにこの店の前を通る少女は、この店の常連となつていた。通りに面したガラス窓から見える、こんがりと焼き上げられたパンに誘われるように入ったのが、この店と氣さくな女主人との出会いだった。

「はい、これ」

そう言つてカウンターの向こうから差し出された袋の一つにはラス

ク、もう一つにはパンの耳が入っていた。猫の餌としてパンの耳を買つたこともあり、それから少女のためにいくつか取つておいてくれるようになつていた。

「こつも、ありがとうございます」

「へこり、と頭を下げ財布を取り出すと「お代はいこのよ」と止められる。

「こつも買つてくれてるお礼。それにそのラスク、新作なの」

よかつたら感想ちょうどいい、その言葉と手元のラスクを見比べるよう。少女は女主人の顔を見て「今頂いても良いですか?」と尋ねる。袋の中のラスクは、今も周りに並んでいるこの店のパンと同じように幸せそうな香りを放っているように思えた。

「ええ、ぜひ」

「いただきまーす」

袋から一枚を取り出しかじるとラスクはサクッと音を立て、口の中には上にかかったシューガーの、ほんのりとした甘さが広がる。思わず、顔がほころぶ。

「おいしい」

つぶやくように言つて、手に残ったかけらを口に含む。女主人はにこにこと幸せそうにラスクを食べる少女を見つめていた。「ごくん、とラスクを飲み込んだ少女は改めて女主人に向き直り「おいしいです」と、伝えた。

「良かった。涼ちゃんがおいしそうに食べてくれるから、私も作った甲斐があるわ」

黒髪の少女 もとい、涼ちゃんと呼ばれた少女は嬉しそうな女主人の顔を見て、見つけた、と思つた。

「『わざわざまでした』と、またぺこりと頭を下げ、もと来た扉を押し開ける。カラソ、という明るいベルの音と「また来てね」と言う女主人の気さくな声のハーモニーに耳を傾けながら

「雨の日の新しい『世界』、見つけた」

と、ラスクとパンの耳の袋を大切そうに握り締めながらつぶやいた。

雨は小降りになり始め、空にまつすらと虹がかかっていた。

【第六話】嘘の口の王冠 (後編)

質問、意見あつまつたら喜んでお読みこたします♪(ーー)♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5941z/>

雨はお嫌い？

2011年12月26日21時47分発行